

『安嘉門院四条五百首』の諸伝本―附十社百首拾遺―

森井信子

要旨 阿仏尼は、播磨国細川庄をめぐる訴訟のために弘安二（一二七九）年秋に鎌倉へ下向した。その際に、勝訴を祈願して十社（三島社、鹿嶋社）に各百首を奉納した。そのうち、鎌倉の今熊野社以下の五社に奉納した各百首が現存し、『安嘉門院四条五百首』（以下、『五百首』）と呼称されている。『五百首』の伝本は島原図書館松平文庫蔵本、薬師寺蔵本、近年になって影印刊行された冷泉家時雨亭文庫蔵本の三本が確認されている。本稿では、これら三本の関係について論じた。また、散逸した『五百首』の前半部分（三島社から稻荷社までの五社に奉納された各百首）の拾遺を併せて試みた。薬師寺本に存する冷泉為村の加証奥書によると、為村が『五百首』の古写本を入手し文庫に納め、その後それを源証が書写したものが薬師寺本だという。しかし、為村の花押が不自然であることから源証書写本を更に転写したものが薬師寺本であると考えられる。そして、三本の本文を校合した結果、為村が文庫に納めた筆者不明の『五百首』が冷泉家本であることが確認できた。

散逸した五百首については、『夫木抄』に収められていることは既に島津忠夫氏によって指摘されているが、この他にも『夫木抄』、『風雅集』の中に、散逸百首の一部と考えられる歌を指摘し、その蓋然性を述べた。

はじめに

安嘉門院四條（阿仏尼）は、播磨国細川庄をめぐる訴訟のために弘安二（一二七九）年秋に鎌倉下向した。その際に、勝訴を祈願して十社に各百首を奉納している。下向途次には三島社、走湯山、箱根宮、鎌倉到着後には、若宮社、稻荷社、今熊野社、えがらの宮、新賀茂社、新日吉社、常陸国鹿嶋社の合計十社千首を奉納したのである。⁽¹⁾ そのうち鎌倉の今熊野社以下の五社の五百首が現存し、【安嘉門院四條五百首】（以下、【五百首】と略称する）と称されている。

【五百首】の伝本は、島津忠夫氏によって紹介された島原図書館松平文庫蔵本と稲田利徳氏によって紹介された葉師寺蔵本との二本が確認されるのみであったが、近年になって冷泉家時雨亭文庫蔵本が影印刊行された。⁽²⁾（以下、松平本、葉師寺本、時雨亭本と略称する。）本稿では、これらの三本の関係について聊か論じることとする。また、散逸してしまった三島社から稻荷社までの五社に奉納された各百首についての拾遺を併せて試みることにする。

一、

まず、三本の書誌を簡略に記すと左記の通りである。

松平本

松平文庫蔵（一三九—七一）。〔江戸中期〕写一冊。縦二二・七 cm。横二二・五 cm。表紙は、濃藍、雷門つなぎ唐草押型。

墨付58丁。外題「安嘉門院五百首」。内題はない。料紙は斐楮交漉紙。歌一首一行書。一面10行。歌題を各歌の頭部に記す。本文は、百首残欠の六首とその跋文から始まり、巻末に作者の勘物を付す。⁽⁴⁾

薬師寺本

稲田氏の解題によると、「江戸中〜後期」写一冊。縦26・0cm、横20・0cm。表紙は、褐色無地の紙表紙。題簽はなく、左肩に「阿仏尼詠五百首、北林といふ」と直書する。内題はない。一面十三行。歌一首一行書で、歌題は、各歌の頭部に記す。墨付25丁。奥書は「此一帖去年冬不慮感得^{筆不知}古本也納文庫之櫃之内被写之筆者は／自性院権僧正源証入来之時ニ被書写之／明和六年冬 戸部尚書（花押）」。⁽⁵⁾本文は「いまくまの、の百首」の序文の途中「しのひてみやる程に〜」から始まり、巻末に宮部義正と澄覚（冷泉為村）の問答、為相と為家の略歴及び作者の勘物を付す。⁽⁵⁾

時雨亭本

久保田淳・小林一彦両氏の解題によると、「室町中期」写一冊。縦24・3cm、横16・5cm。七宝・牡丹などの文様ある黄緞子表紙（改装）。題簽「阿仏五百和歌」と墨書し、表紙中央に添付（現状は糊離れ）。内題はない。料紙は楮紙。歌一首二行書。歌題を各歌の頭部に記す。墨付55丁。一面10行。本文は「いまくまの、の百首」の序文の途中「しのひてみやる程に〜」から始まり、巻末に作者の勘物を付す。

三本の書写年代は、時雨亭本は室町中期、松平本は、松平忠房の蔵書印「尚舍源忠房」はないが、元禄頃の書写と見られる。薬師寺本は加証奥書の明和六年に程近い頃の書写と思われる。三本間の共通点は、まず各百首の名称は記

されているが、本書全体に対する内題を欠いている点が指摘できる。元来千首であったことが関係しているのかもしれない。次に、本文末尾に（但し薬師寺本は奥書の後）に、「安嘉門院四條 権中納言為相卿母儀／平度繁女／續古今集安嘉門院右衛門佐／同集目錄前佐渡守平度繁女／續拾遺集安嘉門院四條／同集目錄前但馬守平度繁」という阿仏尼の出自と呼称とが記されていることが挙げられる。また、三本ともに、一致する注記が4箇所（206番歌「神のみくにの」、246番歌「くもみの庭の秋の庭まで御事」、390番歌「ふかきみのりは」、411番歌「うらのいりなをや」^菜）あることも注目される。206番歌、411番歌にみられるような仮名に漢字を当ててる注記はこれ以外にはない。246番歌の注記については、既に久保田淳氏が、この「姫宮」とは、阿仏尼の一人娘紀内侍であることを指摘されている。⁽⁶⁾ これらの記述は、阿仏尼没後、「五百首」を伝授していた人物（近親者）が後人のために記したものと推測される。

一方、三本間の外見上の違いは、松平本は冒頭部に「安嘉門院／今熊野の百首／えからの宮の百首／新賀茂の社の百首／新日吉の社の百首／鹿嶋の社にたてまつる百首」という目錄があり、続いて百首の残欠本文（歌題「田家」）「祝」の六百とその跋文が存するのに対して、薬師寺本・時雨亭本は「いまくまの、百首」の序文の途中「しのびてみやる程に」を書き出しとすることである。松平本の方が六百多く収め、この六百は稲荷社奉納百首の末尾部分と推定される。松平本の外題は「安嘉門院五百首」とあることから、松平本を書写した時点で前半の四九四首は散逸していたものと考えられる。

次に、薬師寺本の奥書について検討してみたい。奥書（二十四丁表）は、「此一帖去年冬不慮感得筆不知本也納文庫之櫃之内被写之筆者は／自性院権僧正源証入来之時二被書写之／明和六年冬 戸部尚書（花押）」と記されている。続いて、二十五丁表から、冷泉為村の口述を宮部義正が筆記した、「義正聞書」の阿仏尼公御墓の状の抜書が一丁にわたって記されている。また、別筆で「書画便覧」からの引用の旨を記して、為相・為家の略歴の記述もある。稲田氏

が既に指摘されたとおり、これらの勘物類は、江戸期の後人によるものである。奥書の「戸部尚書」については、明和六年（一七六九）の冬に、「戸部尚書」即ち民部卿の職に在ったのは、十二月十二日までが冷泉為村であり、同月十八日からは、油小路隆前がその後任となっている。本書を入手した「戸部尚書」とは、阿仏尼の著作であるだけに、為村と考えてよいであろう。奥書によれば、為村は前年の明和五年冬に思いがけず筆者不明の『五百首』の古写本を入手し、文庫に納めた。その後、自性院の権僧正源証が来訪し、その本を書写した。その際、為村は源証のために加証奥書を書き与えたという。薬師寺本は本文と奥書とが同筆であり、しかも奥書の筆跡が為村ではなく（彼がよくする定家様ではない）、花押も不自然であることから、源証書写本の転写本であろう。この奥書にみえる「古本」こそが時雨亭本であるように思われるが、これについては後述する。

二、本文異同

次に、時雨亭本を底本として、他の二本との異同を掲げることとする。

【本文異同対照表】（※時雨亭本と本文の場合、○とする。判読不能の場合は、■を用いた。）

1	時雨亭本	薬師寺本	松平本
目録と残欠和歌・本文	ナシ	○	安嘉門院／今熊野の百首／えからの宮の百首／新賀茂の社の百首／新日吉の社の百首／鹿嶋の社にたてまつる百首／「田家」

【安嘉門院四條五百首】の諸伝本一附十社百首拾遺

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
175の歌題と和歌	149の歌題	137番歌	122番歌		荏柄宮百首内題			荏柄宮百首序文		103番歌	17番歌			今熊野百首序文		今熊野百首内題
爐火 ともとてはくおきみて	萩	影もる月	はかりものおもふ	〔和歌ノ前ニアリ〕	北野天神	しかとも	天神	北野	まよひつゝ、	みるらめ	日もなし	なるつき日	みにおはぬ	みやる	いまくまの、百首 同題	〔和歌ノ前ニアリ〕
ナシ	萩	水もる月	いろもの思ふ <small>落字</small>	○	○	○	○	○	○	○	日そなし	○	みておいぬ	みゆる	○	○
○	○	○	○	〔序文ノ前ニアリ〕	ナシ	しかと	天神を	北野の	かよひつゝ、	なるらめ	○	なるへき日	○	○	いまくまの、百首	〔序文ノ前ニアリ〕
																山こしに

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
369 番歌	359 番歌	355 番歌	348 番歌	347 番歌	343 番歌	333 番歌	新賀茂社百首跋文	296 番歌	289 番歌	286 番歌	282 番歌	279 番歌	267 番歌	263 番歌	212 番歌	199 番歌	197 番歌
峯のした	いさゝらは	せきのし水	ほとに	、(か)るかや	かはをさ <small>お敷</small>	みも	この百首は／弘安四年	日か	おひたゝん	ゆめちと	すますなりにし	はくらん <small>か敷</small>	冬ころも	とりく	春なれは	へにける	うきよを
きしのした	いさらは <small>落字敷</small>	せきしみつ <small>落字敷</small>	をとに	かつかや <small>本ノママ</small>	○	○	○	日は	おもひたゝん	ゆめちも	すまになりにし	○	冬とても	○	はるなれや	○	うきよの
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
					川をさ	みな	この百首は弘安四年					かくらん		としく		へにけり	

51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37
491 番歌	476 番歌	475 番歌		466 番歌	464 番歌	458 番歌	447 番歌	444 番歌	439 番歌	424 番歌	412 番歌	394 番歌	383 の歌題	376 番歌
いつる日か	なれと	おもひ出もかな	みはや	たよりもある	かみに	よはる	まつまは	すくる	みのり	よそに	のこるか と	心の	旅恋	つもる 歌 る
いつる日は	なれは	思ひをもかな	○	たよりもある <small>落字歌</small>	かみの <small>に</small>	かはる	まつまに	すへる	みのめ	そそに <small>本ママ</small>	のこるを <small>落字歌</small>	○	旅	○
○	○	○	みるや	○	○	○	○	○	○	○	○	心を	○	つもる

本文異同は51箇所存する。時雨亭本に独自異文はなく、必ず松平本または薬師寺本に一致している。
 薬師寺本は、時雨亭本と共通する傍記があり、24「はくらん」^{か歌}、31「かはをさ」^{お歌}、37「つもる歌」^るは、時雨亭本の傍

記とその書き方までも一致している。(これに対し、松平本は24「かくらん」、31「川をさ」、37「つもる」と傍記を採用した本文となっている。)この他、百首歌名(内題)の書写位置(2「いまくまの、百首」の名称が和歌の前にある)、文字の大きさ(29「この百首は弘安四年」等、細かい点で一致している。ところが、薬師寺本には「落字歟」(15・34・35・40・47)、「本ノママ」(32・41)という傍記が存し、親本の本文に不審を記している。また、17「萩」を「萩」とする、18「爐火」の歌題と歌の脱落、38歌題「旅恋」を「旅」とするなど、薬師寺本には誤写と思われる異同が数箇所あり、親本を忠実に書写したとはいえない点も存する。或いは、転写過程で誤りが生じたものとも考えられる。

以上、薬師寺本は、外見上からも本文上からも時雨亭本の転写本であると認めることができよう。松平本は、本文系統を異にするとはではないが、時雨亭本とは別個に伝えられた本文である。それは所収歌数が六首多いという点にも表れている。

ところで、金沢市立中村記念美術館の『古筆手鑑』に『五百首』の断簡一葉を見出すことができる。^(?)伝称筆者は「為家卿」となっている。『五百首』は為家没後の作品であるが、書写年代は確かに鎌倉時代と認めることができる。料紙の大きさは31.4×17.9 cm。本文は、「□□□□□□□□□□むや里人／はるなれは峯はさなからかすみにて／ふもとを風とさえぬゆきかな／かたしきのそてはこほれとはるかせに／ちりすきにけるむめか、そする／つきもせすたかくりいたすいと、とてか／みとり□□やなきはるをへぬらん」(新賀茂社百首211下句から214番歌)。歌題を欠いている点が他本と異なっている。本文異同として、212番歌の初句「はるなれは」が、時雨亭本・薬師寺本ではなく、松平本に一致する点に興味深い。

三、十社百首拾遺

『五百首』は、本来十社に各百首を奉納したものであったことが、鳥津忠夫氏によって指摘されている。⁽⁸⁾それは、「えがらの宮の百首」の序文に「かくてむつのやしろにはつゝみでにしたがひてしだいによりてたてまつりつ」とあること、『夫木抄』に散逸した一部がみられること、松平本に散逸百首の残欠六首が存在することを根拠とする。「えがらの宮百首」は、『五百首』の二番目に位置する百首歌であり、序文によればこれ以前に六社への各百首の奉納を終えたという。この記述によって『五百首』の現存部分の前に五社に対する各百首が存在していたことがわかるのである。鳥津氏の指摘通り、散逸した五百首の一部は『夫木抄』に見出すことができる。『夫木抄』の詞書によると、阿仏尼は、弘安二年に三島社、走湯山、箱根宮、若宮社、弘安三年に稲荷社の五社に各百首を奉納したことがわかる（末尾の[資料A]を参照）。弘安二年は阿仏尼が鎌倉に下向した年であり、五社は京都から鎌倉に向かう途上に位置することから、これらが散逸してしまつた五百首であると考えられるのである。松平本にみられる六首は、その跋文に弘安三年正月十九日に奉納したとある。これは『夫木抄』「弘安三年稲荷社百首」という詞書に合致する。従つて、この六首は稲荷社奉納百首の末尾部分であると考えられる。

次に、十社各百首を年代順に掲げ、() 内に、現存状況を記した。

・弘安二年 三島社百首 (散逸。『夫木抄』1073・1307)

走湯山百首 (散逸。『夫木抄』545・8128)

箱根宮百首 (散逸。『夫木抄』710・956・1017・2457・2960・4067・8636・9888・13280・17025)

若宮社百首 (散逸) 『夫木抄』 3724・6055・7481・12828・13271

・弘安三年 稻荷社百首 (散逸) 『五百首』 1～6 (松平本のみ存す)、『夫木抄』 4077・7010

新熊野社百首 (『五百首』 7～106、『風雅集』 1894、『夫木抄』 256・2157・5336・7423・11638・13441)

えがら宮百首 (『五百首』 107～206、『夫木抄』 3320・3725・5337・7011)

・弘安四年 新賀茂社百首 (『五百首』 307～406、『風雅集』 477・1113)

新日吉社百首 (『五百首』 207～306)

鹿嶋社百首 (『五百首』 407～506)

右に記したように、『夫木抄』には、散逸した五百首の内21首を見出すことができる。これらは全て詞書に神社名が記されている確実な例であるが、これら以外にも散逸歌である可能性のある歌が存する。以下に、諸書にみられる阿仏尼の作で詞書に「百首歌」とある歌を検討していく。また、『五百首』は堀河百首題に準じて詠じられているため、歌題にも注目していく。

詞書に「百首歌」とあって出典不明の歌は、次の通りである。

・『風雅集』 (903・1441・1597・1894・2015・2016)

・『夫木抄』 (1854・3820・6134・7232・9629・13898・15542)

まず、『風雅集』には阿仏尼の歌が14首入集しており、その中の3首は、『五百首』の歌である。(『風雅集』1894「百首歌の中に」(新熊野社百首95「関」)、『風雅集』477「萩をよめる」(新賀茂社百首244「萩」)、『風雅集』1113「忍逢恋」(新賀茂社百首281「後朝恋」)⁹⁾。従って、『風雅集』は、『五百首』を撰集資料としていたことが認められる。その詞

書は、特に神社名を明記せず、歌題のみである場合や、「百首歌の中に」と極めて簡略である。これら以外に、「百首歌の中に」をもつ詞書の歌は3首存する（903・141・1397）。岩佐美代子氏は、これら3首を散逸した五百首の一部と考えられるものと指摘している。⁽¹⁰⁾

・卷九 旅歌 百首歌の中に、暁を 安嘉門院四条

903 いづかたに有明の月のさそふらむ空にうかるる旅の心を

・卷十五 雑歌上 百首歌よみ侍りける中に、早蕨を 安嘉門院四条

141 いまは世にありてもものうき身のほどを野べのわらびのをりをりぞしる

・卷十五 雑歌上 百首歌よみ侍りける中に、野を 安嘉門院四条

1397 むさし野はみな冬草のしをればに霜はおくともねさへかれめや

903番歌は、『十六夜日記』（69）阿仏尼詠歌「めぐりあふ末をぞたのむゆくりなく空にうかれし十六夜の月」との類似を考え併せて、鎌倉滞在中細川庄問題の勝訴を祈つて諸社に奉納した百首中の散逸した一であるうとし、他の二首も同様に捉えることができる。と岩佐氏は指摘している。その内容を見ると、903番歌は、鎌倉へ旅に出た自分を「空にうかれ」出た月に準えて表現している点が、『十六夜日記』の歌と類似し、『五百首』の中にも、「うかれきてたづきもしらぬわがためや人よぶこ鳥声たえずなく」（新賀茂社百首 220「喚子鳥」）と鎌倉へは「うかれき」と表現する歌もみられる。141番歌の「うき身のほどをくしる」という内容も、『五百首』には我が身の不幸を嘆く歌がみられるのと同様である。例えば、

・うき身には月ならで又なくさめもなくよ、の秋になれぬる（今熊野百首 56 月）

・かぢをたえよるべもなみにしほれつ、我やうきよをわたる舟人（えがら宮百首197 海路）

・なにとわれか、るうき世にすみれ草つみえぬばかり物思ふらむ（えがら宮百首122 堇菜）

などの歌は、訴訟問題を抱えている阿仏尼の状況が如実に表れている歌といえよう。いずれも詞書に「百首歌」とあり、歌題も『五百首』と同様に堀河百首題であることから、これら3首が散逸した五百首の一部である蓋然性が高い。

ところで『風雅集』で右に述べた以外の7首歌には、「百首歌」という詞書がなく、出典も未詳の歌である。その内3首は、為家との贈答歌であるため、考察の対象とはしない。残りの6首を掲げると、

・卷一 春歌上 題知らず

42 日かげさす山のすその春草にかつがつまじるしたわらびかな

・卷三 春歌下 苗代を

263 山川をなはしろ水にまかすれば田のものにうきて花そながるる

・卷五 秋歌上 萩をよめる

477 さこそわれ萩のふるえの秋ならめとの心を人のとへかし

・卷八 冬歌 題知らず

875 をの山はやくすみがまの下もえてけぶりのうへにつもるしら雪

・卷十七 雑歌下 前大納言為家身まかりて後、百首歌よみ侍りけるに

2015 夢にさへたちはなれず露さえし草のかけよりかよふ面影

2016 くやしくぞさらぬ別にさきだちてしばしも人にとをざかりける

42・875番歌の詞書は「題知らず」であるが、歌の内容から、42番歌は堀河百首題の「早蕨」、875番歌は、同じく「炭竈」に当たると考えられる。263・477番歌は堀河百首題で、これらはいずれも情景歌である。「五百首」の歌は、阿仏尼の個人的な状況を歌うものとは限らず、これらのような歌題に忠実な歌も多く存することから、散逸した五百首の一部である可能性を指摘しておく。また、2015・2016番歌は、為家追善百首と思われるが詳細は不明である。次に「夫木抄」について検討する。詞書が、「百首歌」とあるのみで、詠作年次が不明の歌が7首存する。

・卷五 春部五 (雲雀) 百首歌

1854 ながめやる野べのかすみのおち草に声かすかなる夕ひばりかな

・卷九 夏部三 (荒和祓) 百首歌

3820 麻の葉のぬさも取りあへず御祓川はやせに夏を手向けてぞやる

・卷十五 秋部六 (紅葉) 百首

6134 をぐら山松のたえまのみぢばに秋のそめける色ぞかくれぬ

・卷十八 冬部三 (雪) 百首歌合⁽¹⁾

7232 すゑおもみをれふす竹の雪間よりけさはそとの山もかくれず

・卷二十二 雑部四 (野) 百首歌中

9629 なげかじよしやいかにもいはれのおあさちるかや露みだるとも

・卷二十九 (槇) 百首歌

13898 筑波山しげきめぐみにもらさずはたつをだまきも花やさかまし

・ 卷三十三 雑部十五 (衣) 百首恋歌中

1542 てもたゆくしほる涙になれごろもなれぬ人ゆゑそでやくちなん

3820 番歌は歌題が不明だが、「大ぬさのながれてはやきみそぎ川まだよひかけて秋風ぞふく」(新賀茂社百首 240「六月祓」)に類似した表現が見られることから、堀河百首題の「六月祓」の歌題に従って詠んだ散逸歌とも考えられる。

9629 番歌の初句「なげかじよ」は、『五百首』に2例みられる。

・ かくばかりいやしき身ともなげかじよ思ふ事なす神のます世に(新賀茂社百首 228 卯花) 述懐)

・ さのみただよをうの花となげかじよ思ふ事なす神のます世に(新賀茂社百首 228 卯花)

「なげかじよ」は、訴訟問題を抱え憂いを嘆くまいと決意し、自らを奮起させる言葉である。阿仏尼の状況を考慮すると、これも散逸した五百首の一部である可能性が考えられる。また、堀河百首題の「萱萱」に相当する歌と考えられる。

13898 番歌は、「めにみえぬ仏は神とあらはれて人たすくなりわれをもらすな」(鹿嶋社百首 505「述懐」)のように、神仏の御加護を頼みに(「しげきめぐみにもらさずは」) 勝訴を願う(「花やさかまし」) 気持ちを詠んだものとみることができよう。この他に「宮こいで、久しくなりぬことしだに神のみあれにあふひしらせよ」(新日吉社百首 329 葵)など、神仏に頼みを寄せる歌は月日の経過と共に多くみられる。

『夫木抄』の場合、詠作年次、作品名を明記する場合が多いため、これらの歌が散逸した五百首の歌であると証明することは難しいのであるが、歌意を考え合わせるとその可能性は皆無ではないだろう。特に、9629・13898 番歌は可能性

が高いのではないだろうか。

ところで、『夫木抄』には、阿仏尼の春日社奉納百首の3首が収められている(434・9475・1436)¹²。『夫木抄』以外の歌集にはみられず、詠作年次も不明で阿仏尼の伝記からも手がかりを得ることができない。歌の内容をみると、9475番歌「行きあやふきよをわたるかな」と憂いを帯びた内容である。歌題も「五百首」と同様に堀河百首題であることから、勝訴祈願のために、鎌倉へ下向する以前に、藤原氏の氏神である春日社に百首を奉納したと考えることができるであろう。しかしながら、荏柄宮百首の序文に「かくてむつのやしるに」と阿仏尼自身が記していることから、『五百首』とは別個のものという意識があったと思われる。¹³

おわりに

以上、述べてきたことをまとめると次の如くである。

新たに出現した冷泉家時雨亭蔵本を含めて、『五百首』の三伝本について考察した。薬師寺本の奥書にいう冷泉為村が入手した筆者不明の古本とは、時雨亭本であることが確認でき、薬師寺本は、時雨亭本の転写本であろうと推測される。本文を校合した結果、時雨亭本には独自異文がなく、他本に比して優れた本文を有しているといえる。

元来千首であった『五百首』は、三本が書写された当時には、既に前半の五百首を欠いており、わずかに松平本に六首が残るのみであった。『夫木抄』の詞書によって、散逸した百首歌の奉納社とその年次とを知ることができる。また、散逸した五百首については、その一部は、松平本と『夫木抄』とに収められている21首がある。これ以外に『風雅集』、『夫木抄』の中にも、散逸した五百首である可能性のある歌が、数首みられた。『夫木抄』が成立した延慶

三(一三二〇)年には千首が揃っており、『風雅集』が成立した貞和五(一三四九)年頃までは、散逸せずに伝わっていたかと思われる。時を経て、明和五年に為村が入手した『五百首』は、既に半ばを失っていた。一方では、千首の残欠本文を有する伝本が元禄期頃に、伝わっていたことが松平本によって窺われた。また、中村記念美術館蔵の手鑑に押される断簡の如く、歌題が省かれた写本も存在していた。散逸した部分が断簡となつて残っている可能性もあり、目を配っていく必要がある。

(注)

(1) 島津忠夫・今井源衛・中村幸彦「新資料紹介 肥前島原松平文庫」『文学』29・11号 一九六一年、拙稿「安嘉門院四条五百首」の成立過程と構成について」『国文鶴見』33号 一九九八年。

(2) 島津忠夫注(1)に同じ。稲田利徳「いま一本の『阿仏尼詠五百首』の伝本について」(付)、薬師寺蔵歌書管見ノート」『和歌研究会会報』第三十一・三十二合併号 一九六八年。

(3) 『中世私家集』7 冷泉家時雨亭文庫編 久保田淳、小林一彦解題 冷泉家時雨亭叢書 31巻 朝日新聞 二〇〇三年。

(4) 松平文庫本 函架番号一三九一七(松平本の影印本は、松平文庫影印叢書 15巻 松平黎明会編 新典社 一九九八年)。

(5) 薬師寺本は、稲田利徳氏が御提供くださった写真で本文を確認した。

(6) 久保田淳「安嘉門院四条五百首」から 中世の文学 附録25 三弥井書店 一九九九年。

(7) 『金沢市立中村記念美術館手鑑』古筆手鑑大成 16巻 古筆手鑑大成編集委員会編 角川書店 一九九五年。75頁。

(8) 注(1)に同じ。

(9) 『風雅集』に入集する阿仏尼の歌は、以下の11首。42・263・477・875・903・1113・1441・1597・1894・2015・2016番歌(贈答歌3首を除く)。

また、『風雅集』入集する『五百首』は以下のとおりである。

・『風雅集』 卷十七 雑歌下 1894 百首歌の中に 安嘉門院四条(新熊野社百首95 関)

心こそ身のせきもりとなりにけれやすくいづべきこの世なれども

・『風雅集』 卷五 秋歌上 477 萩をよめる 安嘉門院四条(新賀茂社百首244 萩)

さこそわれ萩のふるえの秋ならめもとのころを人のとへかし

・ 『風雅集』 卷十一 恋歌二 III (忍逢恋) 安嘉門院四條(新賀茂社百首281 後朝恋)

人にだにしのぶる中のかつきをたれしらせてか鳥のなくらむ

(10) 岩佐美代子 『風雅和歌集全注釈』 中巻 笠間書院 二〇〇三年。

(11) 『夫木抄』 722番は、「百首歌合」とあるが、「新編国歌大観」でも校訂されているように、「百首」の誤りと考えられる。尚、

宮内庁書陵部蔵本は、「百首歌合」、細川家永青文庫蔵本には、詞書が記されていない。

(12) ・ 『夫木抄』 434 春日社納百首、嵩

春毎にならのみやこをたづねても身をふるすとやうぐひすの啼く

・ 『夫木抄』 945 春日社奉納百首、橋 安嘉門院四條

舟くぐるこつのははしかち人の行きあやふきよをわたるかな

・ 『夫木抄』 1066 春日社奉納百首、不逢恋 安嘉門院四條

よそながら三わのすぎやのいたまよりつらさあらはにあくる山風

(13) 田辺麻友美 『安嘉門院四條五百首』 攷一『十六夜日記』との関わりを中心に「『和歌文学研究』第七十五号 一九九七年。「春日大社にも阿仏尼は同様の歌を懊惱していたこともうかがわれる。(略) 今のところ完本の存在が確認されていない。」という指摘がある。

資料A 散逸百首

●三島社の百首…『夫木抄』 2首

・ 『夫木抄』 1074 弘安二年三島社百首 安嘉門院四條

たのもしな池の鏡をみしまなる神のちかひも万世のかげ

・ 『夫木抄』 1307 弘安二年三島社百首

いづ方にこぎはなるらんおきつ舟ほのかにとほく浪ぢへだてて

●走湯山の百首：夫木抄2首

・『夫木抄』545 弘長二年湯走山百首 安嘉門院四条

世におほふかすみの衣これやさはかみのみけしとたち始めけん

・『夫木抄』8128 弘安三年湯走山百首 安嘉門院四条

見渡せばいそべの山もしろたへに波たちまよふ花さきにけり

●箱根宮の百首：『夫木抄』10首

・『夫木抄』710 弘安二年箱根宮百首 安嘉門院四条

いくしほか袖に色香をうつすらん春は梅さく里のあま

・『夫木抄』956 弘安二年箱根宮百首 安嘉門院四条

かきくらしうき雲まがふ春雨に身はふりはてて袖はかわかず

・『夫木抄』1017 弘安二年箱根宮百首 安嘉門院四条

春駒の水と草とを思ふこそまだのりしらぬ人にかはらね

・『夫木抄』2457 弘安二年箱根宮百首 安嘉門院四条

時しらぬふじのすそののうのはなをこぼれてきたるゆきかとぞみる

・『夫木抄』2960 弘安二年箱根宮百首 安嘉門院四条

まどろまでおきつのはまのほととぎす猶まつかひもなみのよるよる

・『夫木抄』4067 弘安元年箱根にたてまつる百首

ゆみはりの月も入りなば天の川やその浪ちに舟やまよはん

・ 『夫木抄』 8636 弘安二年筥根山奉納百首

わすれずよあやめもみえず行きくらし二むら山のすゑの野ばらは

・ 『夫木抄』 9888 弘長二年筥根宮に奉納歌 安嘉門院四條

旅人のみちゆきくらすひかりとやさはにほたるのうきしまがはら

・ 『夫木抄』 1320 弘安二年筥根宮百首 安嘉門院四條

ながめやるたかねは春の日影にて谷のささふにきえぬ白雪

・ 『夫木抄』 17025 弘安二年箱根宮百首 安嘉門院四條

なにとかはたのみたのまずめのまへにあるもむなしきかげろふのよを

● 若宮社の百首：『夫木抄』 5首

・ 『夫木抄』 3724 弘安二年若宮百首 安嘉門院四條

哀など氷室の氷つれなくてきえぬものからわれくたくらん

・ 『夫木抄』 6055 弘安二年若宮百首、紅葉 安嘉門院四條

松山にははそかへでのまじらずは時雨れけりともいかでかはみん

・ 『夫木抄』 7481 弘安二年若宮百首 安嘉門院四條

やはた山庭火ほのめく松風にあづまのしらべこゑかよふらし

・ 『夫木抄』 12828 弘安二年若宮百首 安嘉門院四條

夜もすがらあしのいとなく音信れて水にすだくにほの村どり

・『夫木抄』131 弘安二年若宮百首 安嘉門院四条

はこねちや山風そよぐささ竹のしのにみだれてあられふるらし

●稲荷社の百首…『夫木抄』2首、松平本『五百首』6首

・『夫木抄』477 弘安三年稲荷社百首 安嘉門院四条

七夕のいほはた衣きぬぎぬに天の川浪立ちわかるらし

・『夫木抄』700 弘安三年稲荷社百首 安嘉門院四条

さのみなどかもめむれゐるみづの江にあともなき名のたちさわぐらん

・松平本『五百首』1 田家

むすびおく露もたまらであれにけりをばなかこひしをだのかり庵

・松平本『五百首』2 懐旧

しのばじと思ひかへすもかへらねばあやにくにただむかしこひつつ

・松平本『五百首』3 夢

とりかさねうつつともなき身のうさをなぐさむ事は思ひねの夢

・松平本『五百首』4 無常

よしやただ夕べの空のうき雲に山かぜはやくうつりゆくよを

・松平本『五百首』5 述懐

あるままに思ふ心をかたりなば誰もなみだををしみやはせむ

・松平本『五百首』6 祝

君が代を神の久しくまもればやほとけの法も光つきせぬ

* 附・他集所収『五百首』

●新熊野の社の百首：『夫木抄』6首、『風雅集』1首

・『夫木抄』256 弘安三年新熊野社百首

春来てはみなわかなにぞ成りにける雪いただきしおきな草まで

・『夫木抄』2157 新熊野百首 安嘉門院四条

一しほのみどりの外も色やそふ花さく春のふぢしろの松

・『夫木抄』5336 弘安三年新熊野宮百首

逢ふさかにむかふる駒を引分けて使にこゆる雲の上人

・『夫木抄』7423 弘安三年新熊野宮百首 安嘉門院四条

衣手もさぞさむからしはしたかの雪うちはらふうだのかり人

・『夫木抄』11638 弘安三年新熊野百首 安嘉門院四条

きのくにやゆらのうらかぜしづかにてかすむみなどにはるはきにけり

・『夫木抄』1341 弘安三年新熊野宮百首 安嘉門院四条

おく霜の人めばかりはかれあしのしたにかはらで春やまつらん

・『風雅集』卷十七 雑歌下 1384 百首歌の中に 安嘉門院四条

心こそ身のせきもりとなりにつれやすくいづべきこの世なれども

●えがらの宮の百首…『夫木抄』 4首

・『夫木抄』 330 弘安三年檜柄宮百首 安嘉門院四条

更行けば庭のかがりび焼捨ててほたるにゆづる夏のみじか夜

・『夫木抄』 375 同年(弘安二年) 檜柄宮百首 同(安嘉門院四条)

都には日つぎのひむろあしたゆくきみがためとてさぞはこぶらし

・『夫木抄』 537 同(弘安二年) 同(安嘉門院四条)

くもりなきつきも半の秋ごとに影をならぶ駒引のこま

・『夫木抄』 711 同(弘安二年) 檜柄宮百首 同(安嘉門院四条)

とことほに涙の川をまくらにてうきたるかもの音こそなかるれ

●新賀茂の社百首…風雅集2首

・『風雅集』 卷五 秋歌上 477 萩をよめる 安嘉門院四条

さこそわれ萩のふるえの秋ならめものところを人のとへかし

・『風雅集』 卷十一 恋歌二 1113 (忍逢恋) 安嘉門院四条

人にだにしのぶる中のかあつきをたれしらせてか鳥のなくらむ